

第二十八回神事能

あきの螢能

能 殺生石 浦田保親

狂言 水掛簀 茂山千五郎

とき 令和四年六月十八日 開場 午後四時

献能 午後六時

ところ 宇陀市大字陀迫間 阿紀神社 能舞台

主催 あきの螢能保存会



ごあいさつ

あきの螢能保存会 会長 井上源一

しんとした闇に小さな光が瞬く螢の舞う舞台として知られる「あきの螢能」。

万葉ゆかりの地であり長い歴史に包まれた大宇陀阿騎野において開催される

「あきの螢能」は、ご観覧くださった方々や保存会会員の方ならびに関係各位のご理解ご協力により大宇陀の年中行事として定着いたしました。

交通の便の悪い土地でありながら、東京、静岡、名古屋、広島など遠方からも多数お越しくださるのは、私ども主催する者の本望です。

螢能では、能がクライマックスに達する場面で会場の全ての明かりを消し、数百のホタルを一斉に夜空に放ちます。その瞬間のために一年がかりで大切に育てられた螢、それを放つ光景は能の背景としての一大演出です。

屋外ならではのこの演出、季節柄梅雨のためそれができないこともしばしばですが、大自然の力には逆らうことはできないもの。その儚ささえ螢能の魅力なのかもしれません。

伝統芸能である薪能をさらに大宇陀ならではの魅力を加えた螢能、しばし俗世を忘れ、また我を忘れて幽玄のムードをご堪能くださればと思います。

第二十八回「あきの螢能」ごあいさつ

宇陀市長 金剛一智

三年ぶりの開催となります、第二十八回「あきの螢能」が各地から多くの皆様をお迎えし、盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。

さて、この大宇陀は、古事記や日本書紀、万葉集に「阿騎野」としてその名を残す歴史と文化が育まれてきた伝承の地であります。特に、本年は壬申の乱から千三百五十年の節目にあたります。吉野を脱出した大海人皇子が阿騎野で味方を得て、東国を目指した起点の地として知られています。また推古天皇が日本で最初の薬獵を行われた場所でもあり、今も尚、薬草栽培が盛んに行なわれています。

古代の息吹を感じさせるここ阿紀神社には、伝統文化を今に伝える能舞台が残されています。織田松山藩時代にはじめられたとされる能楽興行は大正の頃まで行われていました。一時期途絶えましたが、平成四年に奈良浦声会の方々が結成した「あきの薪能保存会」により復活、その後「あきの螢能」として親しまれてきました。

日本を代表する古典芸能と、宇陀の悠久なる歴史、そして妙なる螢の光を融合した、全国でも類のない素晴らしい芸術です。長きにわたって保存運営されてこられた「あきの螢能保存会」をはじめ多くの関係の皆様のご尽力に対しまして、心より敬意を表します。

今後も宇陀市が誇る伝統芸術「あきの螢能」が継承発展されることをご祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

皆様、初夏の夕暮れに幽玄と雅の世界を心行くまでご堪能ください。

会場について

阿騎野（あきの）

阿紀神社の周辺は古来から「菟田吾城（うだのあき）」、「阿騎野（あきの）」と呼ばれています。「日本書紀」に推古十九年（六一一）「夏五月の五日に菟田野（うだの）に薬獵（くすりがり）す」と記載があります。推古天皇の一行がこの地で薬草を採取しました。また、天武天皇が行幸をし、その息子の草壁皇子が薬獵をしたのも阿騎野でした。そして、孫になる軽皇子（かるのみこ）の供をした柿本人麻呂が詠んだかぎろひの歌は万葉集の中でもよく知られています。古来から飛鳥の宮廷と深い関わりがあった地域です。

阿紀神社（あきじんじや）

第十一代垂仁天皇の御代、天照大神をお祀りする地を探し求めて倭姫（やまとひめ）が神の御杖代（みつえしろ）となつて旅に出ました。そして阿紀神社に着かれ、この地で天照大神を四年間お祀りしました。その後さらにお祀りする地を求めて旅は近畿一円に及んだ末、今の伊勢神宮内宮にお定まりになりました。それ故、阿紀神社は「元伊勢（もといせ）」とも呼ばれます。社殿は伊勢神宮と同じ神明造りとなっています。



織田家と神事能

江戸時代中頃、宇陀は織田家が宇陀松山藩として治めていました。三代藩主の織田長頼公は、延宝から元禄にかけて（一六七五〜一六九〇年頃）毎年阿紀神社に「神事能」を奉納していました。家臣だけでなく町民も大勢集まって、南都から呼び寄せた能役者の舞を楽しました。その当時能舞台は「舞殿（まいでん）」と呼ばれていました。松の絵が描かれた鏡板には、安政三年（一八五六）に新調したと記されています。



織田家紋

織田信長

藩主	在任期間
宇陀松山藩 (織田家)	
初代 信雄	1615~30
二代 高長	1630~59
三代 長頼	1659~89
四代 信武	1689~94
五代 信休	1695 相統後転封

番組表

うだ子ども能楽教室発表

—午後四時半—

春日龍神	小沼 蓮	部谷 侑那	安浪丈一郎
狸 々	小南明日奏	堀川 大吉	
岩 船	柳原 音緒	田川睦次郎	棚木 蔵仁
春日龍神	北端 蓬	和田 柚香	伊藤 苺
	田川兼大郎	仲川 優翔	谷岡禾奈子
地謡	浦田 保親	深野 貴彦	山崎 浩之

第二十八回あきの螢能

—午後六時—

仕舞 高砂	浦田 保浩
地謡	越賀 隆之
” ” ”	齊藤 信輔
” ” ”	大槻 裕一
” ” ”	田中 隆夫

市長ご挨拶・火入式

狂言 水掛掣 (みずかけむこ)

聳	茂山千五郎
舅	網谷 正美
女	井口 竜也
後見	柴田 鉄平

休憩

解説「能・殺生石のみどころ」大江信行

能 殺生石 (せっしょうせき) 〈白頭〉

里 女	浦田 保親	後 見
野干(狐)の精霊	” ”	” ”
玄翁道人	宝生 欣哉	” ”
能 力	山下 守之	地 謡
笛	森田 保美	” ”
小 鼓	曾和 鼓堂	” ”
大 鼓	石井 保彦	” ”
太 鼓	前川 光長	” ”

深野新次郎
大江 信行
深野 貴彦
浦田 保浩
越賀 隆之
橋本 光史
齊藤 信輔
大槻 裕一
山崎 浩之

—終了午後八時頃—

あらすじ

「仕舞」高砂 (たかさご)

作者世阿弥。肥後国(熊本県)、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中播州高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷(熊手)と杉箒を持った老人夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を問いただします。老人は、この松こそ高砂の松であり、たとえ所をへだてても夫婦のなかは心が通うものだ、現にこの姥は当所のところ、尉は住吉の者だといえます。そして老人たちは、さまざまな故事をひいて松のめでたさを語り、御代をことほぎます。やがて兩人は、実は相生の松の精であることをあかし、住吉でお待ちしていると告げ、小舟に乗って沖の方へ消えてゆきます。(中人)友成は、土地の者から、再び相生の松のことを聞き、先程の老人夫婦の話をする、それは奇特なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽とまいます。尚、本日は仕舞ですので、曲後半の住吉明神の寿ぎの舞の部分をご覧ください。

「狂言」水掛掣 (みずかけむこ)

日照りの夏、掣(むこ)が自分の田を見に行くと、昨日までなみなみとあつた水がありません。ところが隣の舅(しゅうと)の田には水があるので、掣は畦を切つて舅の田の水を自分の田に引き込み、山へ向かいます。そこへ舅が田の見回りにやって来ます。水を取られているのに気付いた舅は、畦を切つて再び自分の田に水を引き戻し、水を取られないように番をします。そこへ掣が再びやって来て水を引き込もうとするので、舅と口論になり、ついには取っ組み合いの喧嘩になってしまいます。その騒ぎを聞いて妻が駆けつけますが・・・今も昔もよくある農村での「水争い」をテーマにした作品です。水を相手の田から自分の田へ取るところの場面は、狂言のあるつもりで演じる「つもりの演技」を使った楽しい場面です。

あらすじ

「能」殺生石 白頭

(せつしょうせき はくとう)

作者不明。玉藻ノ前伝説と那須野の殺生石の話を綴り合せて創作されたものです。歌舞伎や人形浄瑠璃にも、この能を原点にして、発展させた作品がいくつもあります。

玄翁という高僧(ワキ)が能力(アイ)をつれ奥州から都へ上る途中、下野国(栃木県)那須野ノ原まで来ると、飛ぶ鳥が一つの大きな石の上を通ると落ちるので、不審に思っていると、一人の里女(前シテ)が現れ、その石は殺生石という恐ろしい石だから近寄らないように止めます。玄翁がその由来を尋ねると、女は、むかし鳥羽院につかえていた玉藻ノ前が、実は化生の物であり、その正体が見顕わされ、この野に逃げたが退治されて、その亡魂が殺生石になったという話をしてくれます。そして実は自分がその石魂であると明かして石の中に隠れます。〈中人〉玄翁がその巨石に向かって仏事をなし引導を与えると、石は二つに割れ、中から野干(後シテ)が現れます。野干は天竺(インド)大唐(中国)の世を乱し、ついで日本へ渡って、我が国をも滅ぼそうと玉藻ノ前という美女に変じて宮中へ上がるが、安倍泰成の祈祷で都を追われ、この野に隠れ住んだが、狩り出されて射殺され、その執心が殺生石になったと語ります。そして今貴僧の供養を受けたので、以後、悪事はこないと誓って消え失せます。切能ですが前段は三番目物的な風情があります。野干(狐)の化生で鳥羽院を悩ますというのですから妖艶さと凄みが漂ってしかるべきですが、毒気のある石に僧を近づけまいとし、かつての所業を悔いて成仏を願っているのですから、害心はありません。三国をまたにかけた稀有の妖怪を扱った鬼畜物としては、やさしく仕上がっています。後段の壮絶な狐狩りの再現は、詞章にあったキビキビとした所作の連続で、胸のすく思いがします。

〈白頭〉になると、後シテは常は赤頭のところ白頭にかわり、型も替り、派手になり、目が離せません。



観能のてびき（場面解説）

殺生石 白頭

一 高僧玄翁登場 ー 那須野ノ原 ー

〈登場人物〉玄翁(ワキ) 能力(アイ)

玄翁は能力(従者)を引き連れ、奥州より都に上る途中、
那須野ノ原を通る。

二 里女の登場 ー 殺生石の謂れ ー

〈登場人物〉里女(前シテ) 玄翁 能力

大きな石の上を通る鳥が次々と落ちていくを見て玄翁が不審に思つてるところに里女が現れる。女は、その石の恐ろしい所以を語る。さらにその石魂が自分自身だと明かし、消える。

〈中入〉

三 能力(アイ)語る ー 玉藻の前の伝説 ー

〈登場人物〉玄翁 能力

玄翁は能力に玉藻の前について知つていることを語らせる。天上界や天竺(インド)や大唐(中国)にも現れた狐の化身であり、宮廷から追われこの地で射殺されて殺生石となったと語る。

四 玄翁 石に向かって仏事を行う

〈登場人物〉玄翁 能力

玄翁は成仏させるため仏事を執り行う

五 野干(狐の精霊) 岩より現れて語り、消え失せる

〈登場人物〉野干(後シテ) 玄翁 能力

石が割れ、野干が現れ壮絶な狐狩りの有様を自ら仕方話にて語る。そして
今後は殺生はしないと誓い消え失せる。



あきの螢能の演目

(能)

(狂言)

(会場)

第一回	平成 四・四・二九	羽衣 和合之舞	—	阿紀神社
第二回	平成 五・四・二九	小鍛冶	附子	阿紀神社
第三回	平成 七・六・一七	天鼓 弄鼓之舞	清水	阿紀神社
第四回	平成 八・六・二九	融クツ口ギ	仏師	阿紀神社
第五回	平成 九・六・一四	橋弁慶 杜若	伯母ヶ酒	阿紀神社
第六回	平成 一〇・六・一三	葵上 梓之出	清水	文化会館
第七回	平成 一一・六・一二	巻絹 神楽留	昆布壳	阿紀神社
第八回	平成 一二・六・一七	百万	附子	文化会館
第九回	平成 一三・六・一六	舍利	金山	阿紀神社
第十回	平成 一四・六・一五	安達原	文蔵	阿紀神社
第十一回	平成 一五・六・一四	海士	鬼瓦	文化会館
第十二回	平成 一六・六・一九	鉄輪	柑子	阿紀神社
第十三回	平成 一七・六・一八	班女	膏薬煉	阿紀神社
第十四回	平成 一八・六・一七	殺生石 白頭	殺因幡堂	文化会館
第十五回	平成 一九・六・一六	清経 替之型	文山立	阿紀神社
第十六回	平成 二〇・六・二一	野守 黒頭	昆布壳	文化会館
第十七回	平成 二一・六・一三	田村 替装束	飛越	阿紀神社
第十八回	平成 二二・六・一九	国栖	清水	阿紀神社
第十九回	平成 二三・六・一八	船弁慶 前後之替	長光	文化会館
第二十回	平成 二四・六・一六	石橋 大獅子	寝音曲	文化会館
第二十一回	平成 二五・六・一五	葵上 梓之出	因幡堂	文化会館
第二十二回	平成 二六・六・二一	敦盛	仏師	文化会館
第二十三回	平成 二七・六・二〇	山姥 白頭	寝音曲	文化会館
第二十四回	平成 二八・六・一八	項羽	左近三郎	阿紀神社
第二十五回	平成 二九・六・一七	鞍馬天狗 白頭	千鳥	阿紀神社
第二十六回	平成 三〇・六・一六	巴 替装束	附子	阿紀神社
第二十七回	令和 元・六・一五	小鍛冶 白頭	太刀奪	文化会館